

2007年12月 第59回舞踊学会(岡山大会)
第2日目:12月2日(日)
シンポジウム報告(13:00-16:00)

「からだ・トポスとの対話」

倉敷公民館大ホール

司会 片岡 康子(早稲田大学客員教授)
講師 柳沢 秀行(大原美術館学芸課長)
村田 芳子(筑波大学教授)
太田 一枝(岡山大学教育学部
附属中学校教諭)
木佐貫邦子(舞踊家、桜美林大学准教授)
吉川 周平(京都市立芸術大学、日本伝統
音楽研究センター所長)
*シンポジウム後援
岡山県 岡山教育委員会 倉敷市
倉敷教育委員会 大原美術館

テーマ設定趣旨

21世紀に入って加速する現代芸術の動向を捉えるキーワードとして「からだ」、「トポス」が浮上する。ポスト・モダンダンス以降、アーティストが創造の場として脱劇場を試み、舞踊の領野を切り拓いてきたことは多くの舞踊家の活動からも明らかである。また今日、身体表現・ダンスは、「トポス」そのものと同時に、「トポス」を取り巻く人々や社会との連携交流から新たな可能性を求める方向に動いていると見ることができる。こうした脱劇場・コミュニティー志向は、かつて地域に密着して、いろいろな場で演じられた芸能への回帰とも見ることができるのではないだろうか。このような動向がもたらす身体表現・ダンスの新たな可能性と同時に抱えることになるとと思われる問題などについて、現代の実態をおさえながら議論を進めることを趣旨とした。

企画趣旨にふさわしい研究や活動を展開されている講師の先生方に貴重な発表をお願いすることができた。特に学会外からゲスト講師として、大会開催地倉敷で優れた美術館運営をされている大原美術館の柳沢秀行氏、多彩な場において独自の舞踊を展開しておられる舞踊家木佐貫邦子氏をお招きすることができたことは幸いであった。ここに、各講師の講演及び質疑応答の概要を報告する。

各講師の発表概要

柳沢秀行氏

「展示する」+「体感・体験する」アート・ミュージアム

大原美術館の近年の実践は、「美の殿堂」として美的作品を保管し公開する「展示するアート・ミュージアム」から「来館者が体感する、あるい

は体験学習するアート・ミュージアム」への脱皮とも捉えられる。大原美術館の事例について企画者である学芸員の立場から報告され、その1事例として、ダンスとの出会いから波及したミュージアムの変化についても触れられた。

作品を展示する美術館(トポス)が「身体を入れ込む場」に変身すると、子ども・参加者が変身していくという強烈な変化について、事例を交えながら話された。

村田芳子氏・太田一枝氏

「ダンスとアート・ミュージアムとの出会い」

大原美術館において2002年から毎夏(8月の最終土日)実施されている「チルドレンズ・アート・ミュージアム」のひとつにダンスワークショップがある。芝生の広場において、子どもたちは、点在する野外彫刻からインスピレーションをうけ、自由な身体表現を行う。戸外のアーティストックなトポスに啓発され、新鮮な心身で表現を模索する。この実践をふまえ、参加者や鑑賞者にどのような可能性を拓くものかなどについて報告された。子どもが感じる、関わる、創り出すトポスを仕掛けること、そして振り付けを与えるよりも自由に解放し、子どもにゆだねることが大切であると語られた。

木佐貫邦子氏

「場のチカラ、カラダ、ダンス」

それぞれの場所にはそれぞれの空気が流れている。踊るとき、私はその空気たちと交わったのか、含まれたのか、それとも戦ったのか。

これまで舞踊家として演じてきた、劇場、スタジオ、ギャラリー、美術館、エントランス、カウンター、洞窟、神社、寺、池、階段・・・それぞれの場が持つチカラは、身体をどう変えたかについて、体験をもとに発表された。

日常空間から舞台に立つとからだははぐれ戸惑う。日常の自分と舞台に立つ自分という二人の自分がいる。筋感覚が反応し、毛穴が開く。ここからどこに向かっているのか?何か所にも立つ(ここにいながら複数の場に身を置く)という試み。身を場にゆだね、立ち上げる。場はチカラを有し、場は立ち上がるなど、経験を丁寧に言語化された。

吉川周平氏

「日本のまつりの場に顕現する肉体の変化と舞踊」

日本の伝統舞踊は、音楽、舞踊、演劇などに分化している西洋近代の芸術と異なり、それらのものが未分化のまま行われている。そこで日本伝統舞踊を組み立てている諸要素を抽出し、それぞれの機能を分析する研究をしてきた立場から、舞踊を顕現させる祭祀の場がからだに働きかけるもの

を、ピナ・バウシュの舞踊団のあり方と対比しながら発表された。



左より柳沢氏、村田氏、太田氏、木佐貫氏、吉川氏

質疑応答の概要

4つの発表に対して多様な視点からの質問があり、演者の皆さんからのお答えや演者同士のクロストークも行われ、「からだ・トポスとの対話」についての探究を深める質疑応答の時間となった。

主な質疑応答内容を以下に紹介する。

Q 大原美術館だからこそこできる企画なのか。

A (柳沢) このような企画立案にあたっては、美術館の建物、展示作品、制度という制約があるが、それらについて柔軟な美術館であればどこでも実現できる。

Q 自由に踊るという指導であったが、振付という指導も考えられるのか。

A (村田・太田) 場に身をゆだねることができない子どもたちが多くなっているのだから、そのためには自由な即興表現によって新しい関係性をつくる、自分で生み出す活動が良いと考えた。

Q 大谷石の採掘場で踊られた時に、想定していたことはできなかったと言われたが、具体的にはどのようなことなのか。

A (木佐貫) 稽古場という狭い場で想像していたものとは全く異なった。石(自然)の上は足元が危ない、安定感がない、外は寒い…。劇場がニュートラルであるのに対して、自然界のそれぞれの場は個性的であり、そこからだのまるごとを置く、という状況になったことだったと思われる。

Q 話の中で、ピナ・バウシュの《カフェミューラー》は憑依型であると言われたが、どのような意味か。

A (吉川) 非憑依型は振付通りに踊れるタイプの作品であり、憑依型は、予定調和ではない、制限のない表現をするタイプの作品といえるのではないか。ピナは、例えば《山の上で叫び声が聞こえる》において、振付通りに踊らせるのではなく、

ダンサーのからだの中からでてくるものを搾り取る、そのようなタイプの作品。

Q 使用音楽のテンポはすべて120だったと思うが、それはどのような意図からか。

A (太田) 子どもたちが彫刻と関わって表現することに対して、音楽が制約を与えないようにという意図でBGMのように流した。

Q 表現はからだの中(筋感覚の場)から立ち上がってくるといえるのではないか。

A (木佐貫) 舞台に行くとき解放され、毛穴が開く、しかし一旦からだを見失う、そして戻ってきて、自分のサイズをつかむ。

Q 「トポス(場)にからだをゆだねる」と「(からだ)が、(からだ)でトポス(場)を立ち上げる」とについて、補足していただきたい。

A (木佐貫) 「ゆだねる」とは、トポスには個性があり、それに逆らえばつかるのではなく、からだをトポスで解放する・泳がす。「立ち上げる」とは、そこにダンサーがいることで場は立ち上がる、ダンサーの意思・意識によってエネルギーが起きる。そこにいる自分は、踊る自分、見ている自分、この二人の自分の距離感を感じながら、主体的に存在している。

以上、存在根拠としての基体である「からだ・トポス」について、身体の拡張としてのトポス、象徴空間としてのトポスとからだの関わりなどの視点から時間一杯に有意義な質疑応答がなされた。

(文責 片岡康子)

《ゲスト講師プロフィール》

柳沢秀行：埼玉県生まれ。1991年より岡山県立美術館学芸員。日本近現代美術史研究を基礎として『1920年代パリの日本人画家』『戦後岡山の美術—前衛達の姿—』他。また現代美術の批評的機能を活かした『ガーデン 現代美術をとおしてみる後楽園』(於：後楽園)他の自主企画を実施。また社会における美術館が果たし得る機能への関心から、同館の教育普及事業、ボランティア運営を担当する。2002年より、大原美術館に勤務。収蔵作品によるテーマ展や、現代作家との企画展を通年で継続実施。また「チルドレンズ・アート・ミュージアム」などの教育普及事業をコーディネートとする。

木佐貫邦子：1958年舞鶴市生まれ、東京育ち。8歳の頃、近所のダンス教室(石井かほる指導)を外から眺めるうちに虜になり入門。23歳よりソロダンス活動を開始。1982～1988年の間に実験的ソロシリーズ「てふてふ」で初期の木佐貫スタイルを形成、海外でも評価を得る。1990年以降は他ジャンルのアーティストとのコラボレーションとして、山下洋輔、カール・ストーン、吉原すみれら多くの世界的音楽家や墨絵の杉吉貢、写真家十文字美信とともに作品を発表している。また、若手グループnéoの育成、独自のワークショップを各地(東京、北海道、愛媛など)で開催し交流を深めることも大切にしている。